

北米植民地と大西洋奴隷貿易の展開

—バー ジニア植民地とサウス・カロライナ植民地の比較分析—

柳生 智子*¹⁾

はじめに

1808年、アメリカ合衆国では奴隷貿易が禁止されたが、その時点ですでに南部諸州では奴隷制経済を基盤とした生産体制が確立し、19世紀前半には安定した奴隷制度が定着していた。これは、本国および植民地商人らの活動を基盤に成立した奴隷の輸入貿易体制の下で、奴隷を輸入しながら、同時に徐々に奴隷が自然増加する社会を実現できていたことに起因する。4世紀以上におよぶ大西洋奴隷貿易の中で、イギリスの北米植民地向け取引の割合は決して高くなかったが²⁾、アメリカにとって植民地時代の奴隷貿易は、植民地の社会・経済を特徴づけ、かつ長期的には独立後の南部奴隷制経済の土台を築いたのである。

大西洋奴隷貿易によって北米植民地に運ばれた奴隷のほとんどが、18世紀初めから独立戦争までの間にバージニアとサウス・カロライナ両植民地に到着した。本研究ではこの時期の両植

民地の経済状況と奴隷制社会成立の条件となった社会的背景を考慮しながら、輸入された奴隷について、奴隷の到着数・到着時期などの記録から見る長期的な傾向と、どのような奴隷が、どのような商人の貿易戦略の下で、アフリカのどの地域から連れて来られたのか、など需要・供給の状況や取引の背景について考察にする。両植民地ともに奴隷貿易によって数万人の奴隷が流入するが、その過程における類似点・相違点を見出し、それらが独立後いかに反映・継承されたかについて言及する。

1980-90年代以降、アメリカ史ではグローバル・ヒストリーとアメリカとの関連が重視されるようになると同時に、アトランティック・ヒストリーが初期アメリカ史研究へのアプローチとして脚光を浴びるようになった³⁾。近年、ハーバード大学デュボイス・インスティテュートなど多くの研究機関の協力の下、現存する約35,000隻の奴隷船の記録を網羅した大西洋奴隷貿易のデータベースが完成し、この資料を用い

*柳生智子 (Tomoko YAGYU)：慶應義塾大学経済学部准教授。ノース・カロライナ大学チャペルヒル校大学院歴史学研究科修了，Ph.D (歴史学)。「19世紀アメリカ南西部における綿花プランテーション経営—遠隔地管理についての一考察—」『三田学会雑誌』103巻3号，2010年；「南部奴隷取引の発展およびその拡大と支持の背景—ネットワークによる経営戦略と世界観の形成—」『アメリカ経済史研究』7号，2010年，など。

¹⁾本研究は2010年度福澤論吉記念慶應義塾学事振興基金の助成の成果の一部である。

²⁾大西洋奴隷貿易によって輸送された奴隷約1,100万人の3-5%が北米植民地に到着した。

³⁾アトランティック・ヒストリーの代表的研究として以下参照。David Armitage and Michael Braddick eds. *The British Atlantic World, 1500-1800*, New York: Palgrave, 2002; Bernard Bailyn and Patricia L. Denault eds., *Soundings in Atlantic History: Latent Structures and Intellectual Currents, 1500-1830*, Cambridge, MA: Harvard University Press, 2009; Bernard Bailyn, *Atlantic History: Concepts and Contours*, Cambridge, MA: Harvard University Press, 2005; 和田光弘・森丈夫訳『アトランティック・ヒストリー』名古屋大学出版会，2007年。

た新たな研究が多く発表されている⁴⁾。こうした数量的研究が見られる一方で、アフリカの奴隷の「ディアスポラ研究」が一つの大きな流れを形成している。ブラック・アトランティックの議論を軸として、奴隷の流出が大西洋世界に与えた影響、特に北米大陸の奴隷への長期的影響の分析が注目を集めており、アフリカの文化・慣習の連続性を巡る議論、奴隷が北米にもたらした諸技能の可能性についてなど、活発な論争がなされている⁵⁾。

大西洋奴隷貿易全体の中では、北米植民地の奴隷の入港数は西インド諸島の植民地に比べて少なく、副次的な供給先に過ぎなかった。研究蓄積も、西インド諸島の奴隷貿易に関するものがより充実している⁶⁾。北米植民地では、大西

洋貿易における植民地商人とイギリス商人との関係、輸作物の貿易構造などが経済史研究の重要な位置を占めてきた。近年の大西洋奴隷貿易に関する研究では、積極的に関与して利益をあげていた北部ロード・アイランドやマサチューセッツなどの商人の活動の分析、奴隷入港の中心であったバージニアとサウス・カロライナに到着した奴隷の労働や生活の実態、人口動態などの分析が進められている。しかし、奴隷貿易の実態や背景については、まだ明らかでない点が多い⁷⁾。北米植民地の大西洋奴隷貿易に関する資料はイギリスに多いが、植民地の資料にもその実態を把握する数量的資料は存在する。植民地によって残存する資料に違いがあるため、植民地間の単純な比較は困難であるが、両植民地における奴隷貿易の発展の輪郭を明確にすることが本稿の目的である⁸⁾。

⁴⁾ David Eltis, Stephen D. Behrendt, David Richardson, and Herbert S. Klein eds., *The Trans-Atlantic Slave Trade: A Database on CD-ROM*, Cambridge: Cambridge University Press, 2000. David Eltisが中心となり、データベースをもとにしたウェブサイト (<http://www.slavevoyages.org/tast/about/history.faces>) が完成した。このデータベースを用いた研究にDavid Eltis and David Richardson, *Extending the Frontiers: Essays on the New Trans-Atlantic Slave Trade Database*, New Haven, CT: Yale University Press, 2008 がある。

⁵⁾ ディアスポラ研究で、奴隷のアフリカからの文化・慣習の連続性を主張する代表的研究はJohn Thornton, *Africa and Africans in the Making of the Atlantic World, 1400-1680*, Cambridge: Cambridge University Press, 1992; Gwendolyn Milder Hall, *Africans in Colonial Louisiana: The Development of Afro-Creole Culture in the Eighteenth Century*, Baton Rouge: Louisiana State University Press, 1992. 米の栽培方法のアフリカからの伝播の可能性について近年議論が活発化している。AHR Exchange: The Question of “Black Rice,” *American Historical Review* 115, Feb., 2010, pp. 123-171; Judith Carney, “African Rice in the Columbian Exchange,” *The Journal of African History* 42, no.3, 2001, pp. 377-396; Daniel C. Littlefield, *Rice and Slaves: Ethnicity and the Slave Trade in Colonial South Carolina*, Baton Rouge: Louisiana State University Press, 1981, chap. 4.

⁶⁾ 代表例として、Russell R. Menard, *Sweet Negotiations: Sugar, Slavery and Plantation Agriculture in Early Barbados*, Charlottesville: University of Virginia Press, 2006; Barbara L. Solow and Stanley L. Engerman eds., *British Capitalism and Caribbean Slavery: The Legacy of Eric Williams*, Cambridge: Cambridge University Press, 1987 など。

⁷⁾ John J. McCusker and Russell R. Menard, *The Economy of British North America, 1607-1789*, Chapel Hill: University of North Carolina Press, 1986; Cathy Matson ed., *The Economy of Early America: Historical Perspectives and New Directions*, University Park, PA: Penn State University Press, 2006. Peter A. Coclanis, *The Shadow of a Dream: Economic Life and Death in the South Carolina Low Country 1670-1920*, New York: Oxford University Press, 1989; Philip D. Morgan, *Slave Counterpoint: Black Culture in the Eighteenth Century Chesapeake & Lowcountry*, Chapel Hill: University of North Carolina Press, 1998 など参照。

⁸⁾ 資料は、バージニアについてはVirginia Naval Office Shipping Lists, in Lorena S. Walsh, “The Chesapeake Slave Trade: Regional Patterns African Origins, and Some Implications,” *The William and Mary Quarterly* 58, no. 1, Jan., 2001, pp. 139-170; Walter Minchinton, Celia King, Peter Waite eds., *Virginia Slave Trade Statistics, 1698-1775*, Richmond: Library of Virginia, 1984; Elizabeth Donnan, *Documents Illustrative of the Slave Trade to America*, vol. 4, Washington D.C.: Carnegie Institute of Washington, 1930-35. サウス・カロライナに関してはRecords of the Public Treasurer of South Carolina 1735-1775, South Carolina Department of Archives and History, 以下SCDAH; *South Carolina Gazette* (1733-1774) Early American Newspaper Series microfilm, New York Public Library; Donnan, *Documents*; Philip M. Hamer et al eds., *Papers of Henry Laurens*, Columbia: University of South Carolina Press, 1968-1988; Walter D. Edgar, *The Letterbook of Robert Pringle*, vol. 1,2, Columbia: University of South Carolina Press, 1989 を使用。

1. バージニア植民地における奴隷貿易

(1) タバコ生産と奴隷需要

バージニアとメリーランド両植民地にまたがるチェサピーク湾岸地域では、プランテーションの個別の記録に加えて、土地権利証書、遺産目録、課税記録など多くの資料が保存されており、1970年代から「チェサピーク・スクール」と呼ばれたチェサピーク湾岸地域を研究対象とする大勢の歴史家が登場した。ウォルシュ、クリコフ、モーガンらの研究によって18世紀の同地域の人口動態、タバコ生産と貿易構造、プランテーション経営のあり方などが次々と分析され、北米植民地の中でも最もその社会と経済の実態が明らかにされている地域となった⁹⁾。

17世紀からこの地で生産が開始されたタバコは、イギリス重商主義体制下の列挙品目としてイギリス本国へ出荷された。17世紀末からタバコ労働は白人年季奉公人から黒人奴隷へと移りはじめ生産量は上昇したが、18世紀には価格の低下と度重なる不況で長く低迷が続いた¹⁰⁾。チェ

サピーク湾岸地域のタバコは、地質によって生産される品種が2種に大別され、それによってプランテーションの規模や必要とされる奴隷労働数にも差が生じた。芳香種 (sweet-scented) とオロノコ種 (oronoco) の2種がイギリスに出荷されたが、芳香種が高級タバコとして主にロンドン市場で嗜好家を対象に取引されたのに対し、オロノコ種はイギリスからヨーロッパ大陸、特にフランス市場に向けて再輸出された¹¹⁾。チェサピーク湾岸地域のタバコ貿易はロンドン、ブリストル、リバプールの3大都市の商人が取り扱ったが、ロンドンやブリストルがイギリス国内とアイルランド市場に集中したのに対し、リバプールの商人は再輸出市場向けタバコの貿易に従事した¹²⁾。18世紀半ば以降は、特にグラスゴーのスコットランド商人がバージニアの内陸に進出し、再輸出市場向けのタバコを、店舗で買い取る新しいシステムで取り扱うようになった¹³⁾。

バージニア植民地では、バルバドスの先例に倣い、黒人を奴隷と規定する法律が1660年代に

⁹⁾ チェサピーク湾岸地域研究で本稿に関連する代表的なものとして、Lorena S. Walsh, *Motives of Honor, Pleasure, & Profit: Plantation Management in the Colonial Chesapeake*, Chapel Hill: University of North Carolina Press, 2010; Allan Kulikoff, *Tobacco and Slaves: The Development of Southern Cultures in the Chesapeake, 1680-1800*, Chapel Hill: University of North Carolina Press, 1986; Lois Green Carr, Phillip D. Morgan, and Jean B. Russo, *Colonial Chesapeake Society*, Chapel Hill: University of North Carolina Press, 1989; Jean B. Russo and J. Elliott Russo, *Planting an Empire: The Early Chesapeake in British North America*, Baltimore: The Johns Hopkins University Press, 2012 など。タバコ貿易に関してはJacob M. Price, *Capital and Credit in the British Overseas Trade: A View from the Chesapeake, 1700-1776*, Cambridge, MA: Harvard University Press, 1980; 和田光弘『紫煙と帝国—アメリカ南部タバコ植民地の社会と経済』名古屋大学出版会, 2000年。

¹⁰⁾ 白人年季奉公人から黒人奴隷への転換はRussell R. Menard, "From Servants to Slaves: The Transformation of the Chesapeake Labor System," *Southern Studies* 16, 1977, pp. 355-390 を参照。世紀転換期のタバコ価格の低下と長期不況については、Kulikoff, *Tobacco and Slaves*, chap.3; Walsh, *Motives of Honor*, chap. 3.

¹¹⁾ 植民地のタバコ貿易に関しては多くの研究蓄積がある。脚注9に加えて、Jacob M. Price, *France and the Chesapeake: A History of the French Tobacco Monopoly, 1684-1791*, Ann Arbor: University of Michigan Press, 1971; Russell R. Menard, "The Tobacco Industry in the Chesapeake Colonies, 1617-1730: An Interpretation," *Research in Economic History* 5, 1980, pp.109-177など参照。

¹²⁾ Lorena S. Walsh, "Liverpool's Slave Trade to the Colonial Chesapeake: Slaving on the Periphery," in David Richardson, Suzanne Schwarz and Anthony Tibbles eds., *Liverpool and Transatlantic Slavery*, Liverpool: Liverpool University Press, 2007, p. 101.

¹³⁾ スコットランド商人についてはJacob M. Price, "The Rise of Glasgow in the Chesapeake Tobacco Trade," *The William and Mary Quarterly* 11, no.2, April, 1954, pp. 179-199; Kulikoff, *Tobacco and Slaves*, chap. 4. 18世紀初頭の大プランターによるタバコ取引では、主に現地代理人による委託販売方式が採用されていた。その後1730年代以降スコットランド商人が小規模生産者を対象に直接小売店舗をバージニア西部に多く設立し、彼らが直接現地でタバコを買い取り、イギリスの製品・物資を店舗で販売するマーケティング方式を採用した。Walsh, *Motives of Honor*, chap. 5.

制定され、この奴隷身分の法的確定が奴隷輸入の一層の増加をもたらした¹⁴⁾。17世紀半ばまでのバージニア植民地経済は小規模農民による農業社会を基盤としたが、1670年代ごろから大量の奴隷を使用するプランテーションが増大した。その背景として、1672年に設立された王立アフリカ会社の独占によるイギリス奴隷貿易の隆盛があった。王立アフリカ会社設立以前はバージニアに到着する奴隷の多くが西インド諸島から流入したと言われているが、1670年代になってアフリカとの直接取引が開始されたことで貿易構造が変化した。こうした変化を受けて、17世紀末までには、バージニアの大プランターの中にイギリス奴隷商人の代理人または委託販売商人の役割を果たす者が現れ、拡大する奴隷需要に応じてアフリカからの奴隷到着数も増えていった。バージニア植民地は1730年代に奴隷輸入がピークに達し、独立戦争までに8万人近くの奴隷が到着した（表1、2）¹⁵⁾。

チェサピーク湾岸地域のそれぞれの地区において、特定のタバコの品種の生産が定着するに従い、地区別に必要奴隷数に差が生じたが、それは奴隷をバージニアに送り込むイギリス奴隷商人の貿易戦略にも影響を与えた。イギリスの奴隷貿易では、王立アフリカ会社による独占終了後20年間ほどはロンドン商人による取引が大半を占めた。しかし1720年代後半にはブリス

トル商人による取引が急成長し、1720年代後半から30年代にかけて、ブリストルの奴隷貿易の全盛期を迎えた。1730年代後半以降はリバプールが奴隷港として台頭し、ロンドンやブリストルを圧倒するようになった。ロンドン、ブリストル、リバプールのそれぞれの商人はチェサピーク湾岸地域の特定の地区に奴隷取引活動を集中させていく傾向が見られ、アフリカでの奴隷獲得も、特定の地域に集中していったことが分かっている¹⁶⁾。

チェサピーク湾岸地域のタバコ生産地区は地形、地質、生産規模などによって5つの地区に分けられる。ラパハノック川より北にあたる湾岸の北西部一帯の領域、および湾の南端に流れ着くジェームズ川より南西の地域はオロノコ種のタバコ生産地域であった。一方、芳香種のタバコは、ラパハノック川とジェームズ川に挟まれた地域、特にヨーク川流域の大プランテーションにおいて生産された。ラパハノック川、ヨーク川流域はプランターの富が集中し、バージニア植民地の政治権力者の多くが住んでいた。彼らはイギリス商人ともつながりが深く、この地域は大西洋経済の商業ネットワークが最も緊密に発展した地域でもあった。芳香種のタバコは生産コストが高かったが、大プランターの豊富

¹⁴⁾ バージニア植民地では1661年に黒人を永久隷属状態に置くことを規定した法律が制定され、1669年には黒人奴隷はその労働が所有者に属する人間としてではなく、動産・資産として規定された。Kenneth Morgan, *Slavery and the British Empire: From Africa to America*, Oxford: Oxford University Press, 2007, p. 26.

¹⁵⁾ 王立アフリカ会社についてはK. G. Davies, *The Royal African Company*, London: Longman, 1957 参照。バージニアの17世紀前半までの奴隷についてはSusan Westbury, "Analysing a Regional Slave Trade: The West Indies and Virginia, 1698-1775," *Slavery and Abolition* 7, no. 3, 1986, pp. 241-256; Herbert S. Klein, *The Middle Passage: Comparative Studies in the Atlantic Slave Trade*, Princeton, NJ: Princeton University Press, 1978, chap. 6 参照。

¹⁶⁾ ロンドン、ブリストル、リバプールの奴隷貿易については、それぞれ以下を参照。James A. Rawley, *London, Metropolis of the Slave Trade*, Columbia: University of Missouri Press, 2003; David Richardson, "Slavery and Bristol's 'Golden Age'" *Slavery and Abolition* 26, no. 1, 2005, pp.35-54; Richardson et al eds. *Liverpool*. イギリス奴隷貿易全般については、David Richardson, "The British Empire and the Atlantic Slave Trade, 1660-1807," in P.J. Marshall, *Oxford History of the British Empire: The Eighteenth Century*, Oxford: Oxford University Press, 2001, pp. 440-464; Roger Anstey, *The Atlantic Slave Trade and British Abolition, 1760-1810*, London: Macmillan, 1975; Morgan, *Slavery and the British Empire*. ロンドン商人は、17世紀中は西インド諸島の奴隷貿易に集中した。18世紀になってチェサピークに力を入れたのは王立アフリカ会社の商人ではなく、同会社に属さなかったロンドンの商人層であった。Walsh, "Liverpool," p. 100.

表1 バージニア植民地奴隷人口の推移と奴隷
輸入数 (単位: 人)

年	奴隷 人口	アフリカ 出身の奴隷	アフリカ出身 奴隷の割合(%)	10年毎の 奴隷輸入数
1700年	13,000	6,500	50	7,700
1710年	19,500	10,161	52	6,750
1720年	27,000	12,209	45	12,700
1730年	40,000	17,530	44	15,700
1740年	65,000	22,288	34	12,000
1750年	105,000	22,544	21	9,200
1760年	140,500	19,236	14	9,700
1770年	180,500	15,973	9	3,900

出所) Morgan, *Slave Counterpoint*, pp. 59, 61.

な資金と、仮に資金繰りが悪化してもイギリス商人から多額の資金・手形の提供を得られる信用の高さから、彼らの生活基盤は安定していた。大プランテーションで大量の奴隷労働を必要としたことから、1745年以前にバージニア植民地に入ってきた奴隷約5万人の3分の2以上がこの地区に到着した。この地区に入ってきた奴隷は18世紀初頭まではロンドン商人が扱ったが、やがてブリistol商人も参入し、互角の取引を行なった。この地区には最良の奴隷が大量に到着することから、内陸の農家や他地区のプランターも奴隷購入のために訪れた。しかし、1735年以降は植民地生まれの奴隷で必要労働力を賄えるようになり、輸入も減少していった(表1)。芳香種生産地区(ヨーク川流域)の北側にあたるラパハノック川流域の奴隷の輸入は1720年から1745年にピークを迎え、1万人以上の奴隷が到着したが、その後はヨーク川流域同様、奴隷の自然増加がみられて輸入が急減した¹⁷⁾。

¹⁷⁾資金不足の小規模プランターや農家では、ロンドンの大商家の裏書保証が取れないため手形の信用度は低く、長期のクレジットやタバコによる現物支払いとの組み合わせを行っていた。Walsh, "Chesapeake," pp. 153-154. バージニアの大プランターについてはDaniel Blake Smith, *Inside the Great House: Planter Family Life in Eighteenth-Century Chesapeake Society*, Ithaca, NY: Cornell University Press, 1986; Rhys L. Isaac, *The Transformation of Virginia, 1740-1790*, Chapel Hill: University of North Carolina Press, 1982; Laura Coughan Kamoie, *Irons in the Fire: The Business History of the Tayloe Family and Virginia's Gentry, 1700-1860*, Charlottesville: University of Virginia Press, 2007 など参照。

表2 チェサピーク湾岸地域に到着した奴隷船・
奴隷数 (単位: 隻、人)

年	奴隷船	西インド	奴隷	西インド
バー ジニア				
1698-1703年	46	6	1,882	16
1704-1718年	193	21	11,295	370
1719-1730年	118	6	15,467	124
1731-1745年	441	99	22,586	786
1746-1760年	180	32	15,231	415
1761-1774年	201	31	11,632	385
合計	1,179	195	78,093	2,096
メリーランド				
1698-1703年	47	1	2,630	55
1704-1718年	18	1	2,315	71
1719-1730年	17		2,152	
1731-1745年	22		2,673	
1746-1760年	73	10	3,235	64
1761-1774年	94	16	5,311	180
合計	271	28	18,316	370

出所) Walsh, "Chesapeake," pp. 166-169より作成。

チェサピーク湾の東側のデルマーヴァ半島と、湾の南側沿岸のジェームズ川下流地区では、18世紀までにタバコ生産を中止しており、木材などを中心とした海軍軍需品産業(naval stores)やとうもろこしなどの穀物の自給的生産が行なわれていた。この地区の奴隷は1660年代以前に西インド諸島、またはオランダ船によって運ばれた西中央アフリカからの奴隷の子孫であると言われ、世紀転換期に到着した奴隷数は他地域に比べ少なかった。しかし、1730年代以降には作物生産の増加や農地の拡大、地域間交流の活発化などによって奴隷輸入が増え、独立戦争前までに6,000人近くの奴隷が到着した。この時期の奴隷の多くは港湾都市として発展しつつあったノーフォークやハンプトンに入り、開拓が進んだノース・カロライナ植民地との州境付近の農場などに定住したと考えられている¹⁸⁾。

¹⁸⁾Lorena S. Walsh, "New Findings about the Virginia Slave Trade," *The Colonial Williamsburg Interpreter* 20, no.2, 1999, p. 14. 海軍軍需品産業は針葉樹から採取できるタール、ピッチ、ロジン、テルペン油などを指す。ジェームズ川下流地区の諸特徴についてはWalsh, "Chesapeake," pp. 146-147. ノース・カロライナは入り組んだ複雑な海岸線のため沿岸地域の発展・交通の発達が遅れ、農業は小規模で奴隷人口は少なかった。

ジェームズ川上流地区は、下流域の発展と並行して開墾地の拡大が進んだ結果、1735年以降奴隷の重要な到着地となる。1745年までには最も多く奴隷が到着する地区となり、1760年代にはバージニア植民地に入った奴隷の3分の2が同地区に到着している。この地区に運ばれた奴隷の大半はブリストルとリバプールの商人の手による¹⁹⁾。この地区の奴隷輸入が18世紀半ばごろに他地域に比べて急速に増えたのは、開墾のため新たに多くの労働力が必要とされたことと、1740年代以降にオロノコ種の中でも、品質が高く芳香種と同程度の高額で売れるタバコの生産がこの地区で可能になったことがあげられる。他地域も同時期にタバコ生産地を西部に拡大していたが、そこでは黒人人口の男女比のバランスが安定し、自然増加が見込めたため、拡大する西部に奴隷を補充するための急激な輸入増は起こらなかった²⁰⁾。

ラパハノック川より北側でポトマック川の南側にあたる地区は地質が悪く、品質の劣るオロノコ種を小規模で生産する農家が点在していた。この地区で必要とされた奴隷数は少なかったが、バージニア植民地政府が課した高関税を避けるためにポトマック川の対岸のメリーランド植民地に奴隷を降ろしてから、バージニアに輸入した事例が多くみられた。このため、ポトマック川南部地区で売られた実際の奴隷数は、記録以上に多いと考えられる²¹⁾。

（２）イギリス商人および奴隷の出身地の分析

i. イギリス奴隷商人

上記のタバコ生産地の特徴と、活動していた

イギリス奴隷商人との関係を見ると、全体では、1698年から1774年までの間にチェサピーク湾岸地域に送られた奴隷の約半分はブリストル商人が扱い、ロンドン商人が約3割、リバプール商人が約2割を取引したことが明らかにされている²²⁾。

先に述べたように、ロンドン商人はバージニアへの奴隷貿易を初期に支配したが、彼らはヨーク川流域のロンドン市場向け芳香種タバコ生産に特化した大プランターとの取引に集中した。ロンドンの商人層は、西インド諸島の砂糖貿易、北米のタバコ・米貿易において他都市の商人を圧倒していたため、奴隷貿易に関しても資金調達の面で有利であった²³⁾。しかし早くからチェサピーク湾岸地域との貿易を重要視したブリストル商人が18世紀初頭にロンドンに匹敵する奴隷輸入数を扱うようになり、ロンドン商人が既に地盤を築いていたヨーク川流域においても1720年代後半以降ロンドンを追い抜いた²⁴⁾。

ロンドンとブリストルの商人はいずれもヨーク川沿いの富裕層との取引を好んだが、リバプールは進出当初からラパハノック川流域に足場を築き、ポトマック川南部地区など他都市の商人が取引していなかった地区に目を付け、新しく開拓が進む西部や川の上流域を活動領域としていった²⁵⁾。リバプールの躍進を受けてブリストルは追い抜かれるが、1740-50年代まではチェサピーク湾岸地域ではブリストル商人が最大の取引を続けた（表3）。ブリストル商人は18世

²²⁾ Walsh, "Liverpool," pp. 98-99.

²³⁾ 王立アフリカ会社は独占終了後、姉妹会社の南海会社（South Sea Company）がスペイン領アメリカの奴隷貿易に参入できる黒人奴隷アシントを獲得したことで、ロンドン商人の奴隷貿易の継続、18世紀後半の再隆盛をもたらした。Richardson, "Bristol," p. 43.

²⁴⁾ ブリストルの台頭は貿易のスピード・効率性・日程の短縮化、ロンドン商人が避けたピアフラでの奴隷獲得に集中したことなどによる。Richardson, "Bristol," pp. 41-44.

²⁵⁾ Walsh, "Liverpool," pp. 105-108. リバプールのタバコ商人もこの地区を中心に活動していた。

¹⁹⁾ Walsh, "Chesapeake," pp. 148-149.

²⁰⁾ バージニアの西部開拓についてはDavid Hackett Fischer and James C. Kelley, *Bound Away: Virginia and the Westward Movement*, Charlottesville: University of Virginia Press, 1999を参照。

²¹⁾ Walsh, "Chesapeake," p. 147; Walsh "Liverpool" p. 108.

表3 チェサピーク湾岸地域に到着したイギリス出発地別、奴隷船・奴隷数 (単位: 隻、人)

年代	ロンドン		ブリストル		リバプール	
	奴隷船	奴隷	奴隷船	奴隷	奴隷船	奴隷
1698-1703年	32	3,665	8	145	1	1
1704-1718年	65	8,896	28	2,729	11	401
1719-1730年	32	5,098	66	10,665	9	985
1731-1745年	22	3,090	75	15,078	47	5,787
1746-1760年	16	1,714	36	8,604	35	4,832
1761-1774年	20	1,748	14	4,190	37	5,569
合計	187	24,211	2,277	41,411	140	17,575

出所) Walsh, "Liverpool," p. 99より作成。

紀半ばにはヨーク川流域から徐々に撤退し、成長著しいジェームズ川上流地区に取引を集中していった²⁶⁾。その結果、ジェームズ川の上流地区および下流地区ではブリストルとリバプール両商人の勢力が拮抗した²⁷⁾。

奴隷の取引と、タバコの取引は同一商人・商家が行なう例も多く見られた。ロンドン商人の活動地区は明確に特化しており、ロンドン市場で芳香種のタバコ販売に従事した商人は初期のラパハノック・ヨーク川流域近辺の奴隷貿易で

活躍し、オロノコ種に特化した商人はメリーランド植民地での奴隷貿易に集中していた²⁸⁾。ブリストルとリバプールも先に活動していたタバコ商人が築いたネットワークに頼ることが多く、リバプールの奴隷商人の3分の2が奴隷貿易参入前にタバコ貿易に従事しており、4分の1ほどは、奴隷貿易より以前の年季奉公人貿易にも関わっていた²⁹⁾。

ii. 奴隷の出身地

次に、イギリス商人とアフリカでの奴隷獲得地域について分析する。奴隷商人の記録やバージニアの海軍局資料により、アフリカの奴隷出身地や、西インド諸島を経由して北米植民地に到着した奴隷数などがある程度判別でき、バージニアに到着した奴隷の構成について考察することが可能になる³⁰⁾。

大プランターが集中し、奴隷輸入数が最も多かったヨーク川流域においては、ビアフラ出身の奴隷が圧倒的に多く、約半分を占めた。次いで約2割が西中央アフリカ（アンゴラ）、さら

²⁶⁾ Walsh, "Chesapeake," p. 152.

²⁷⁾ ブリストル商人はアフリカの特定の地域出身の奴隷をバージニアの特定の地区に送る戦略を採り、セネガンビア、ウィンワード海岸・黄金海岸の奴隷はラパハノック川流域で売却し、ビアフラからの奴隷はヨーク川流域やジェームズ川上流地区で売却した。ロンドン商人は黄金海岸、セネガンビアおよび西中央アフリカ（アンゴラ）での奴隷獲得に集中し、ヨーク川流域で販売した。遅れて参入したリバプールはあらゆるアフリカの地域から、進出可能な全ての地区に奴隷を送り込む方針をとった。リバプール商人による市場の開拓はアフリカでの奴隷獲得でも見られ、新たにシエラリオネ、カメルーン、ガボンなどに積極的に進出した。更に、アフリカの地元社会に密着した商業活動や、ジャマイカ・バルバドスなど最も奴隷を多く輸入した西インド諸島で強力な地盤を形成したことが彼らの強みとなった。リバプール商人はロンドンやブリストルに比べて比較的小さな奴隷船で取引を行なったため、到着地を選ぶ柔軟性があったとも言われている。また、製造業の中心であったマンチェスターとの緊密な金融ネットワーク、ランカシャー南部の手形市場とロンドンの手形受取商家との関係の深さなどから、長期の手形の提供を可能にしたことも彼らの躍進に貢献した。1750年代には手形支払いの方法をプランターからの支払いの遅延がなくなるように変更し、効率よく利益をあげることを実現した。Kenneth Morgan, "Liverpool's Dominance in the British Slave Trade, 1740-1807," in Richardson et al eds. *Liverpool*, pp. 14-34.

²⁸⁾ ロンドン奴隷商人は、17世紀半ばからのタバコ取引の経験からバージニアでの土地勘があったと言われる。Walsh, *Motives and Honor*, chap. 3

²⁹⁾ Walsh, "Liverpool," p. 102.

³⁰⁾ 大西洋奴隷貿易とアフリカでの奴隷供給状況についてはHerbert S. Klein, *The Atlantic Slave Trade*, Cambridge: Cambridge University Press, 1999, chap.3; Patrick Manning, "Contours of Slavery and Social Change in Africa," *American Historical Review* 88, no.4, Oct., 1983, pp. 836-857参照。

に約1割はウィンワード海岸・黄金海岸地区出身の奴隷であった³¹⁾。マダガスカルからの奴隷は全体ではごくわずかであったが、最も多く到着したのはこの地区であった。その他、セネガンビア、シエラリオネ、ベニン海岸からも特定の時期に少数の奴隷が入港した（表4）。ラバハノック川流域も18世紀の初めから奴隷の流入が多く見られ、比較的均等にあらゆるアフリカの地区から輸入されていた。その中でもセネガンビアとビアフラからの奴隷が多く、両地域からの奴隷をあわせると6割近くになった³²⁾。一方、1730年代まで主要な奴隷取引地域ではなかったジェームズ川上流および下流地区については、上流地区の方が多くの資料が残され、より正確な情報が得られる。ジェームズ川上流地区にはビアフラからの奴隷が3割以上を占め、次いで西中央アフリカ、さらにセネガンビアとウィンワード海岸・黄金海岸からの奴隷が同程度であった³³⁾。全期間を通して資料が不十分なボトマック川南部地区、ジェームズ川下流地区、さらに到着地区が不明の奴隷も含めた全体の傾向としては、アフリカの中でもビアフラとセネガンビアが安定的な供給源となっていたと言える。次いで多かったのが、ウィンワード海岸・黄金海岸地区と西中央アフリカであった。西中央

アフリカについては表5より、1730年代以降増加傾向にあったことが分かる。ウィンワード海岸・黄金海岸については安定した供給源とはいえず、シエラリオネ、ベニン海岸、マダガスカルからの奴隷は少数であったことが分かる。

アフリカでの出身地に加えて、西インド諸島を経由した奴隷について考慮するとバージニアの奴隷の構成はより複雑になる。アフリカからの奴隷の直接輸入が増加する以前、17世紀におけるバージニアの奴隷は、これまでは西インド諸島から入ってきたという見解が主流であった。しかし、最近の研究ではその見解が疑問視されるようになり、特に17世紀前半のバージニアの奴隷については不明点が多い³⁴⁾。一方、18世紀に輸入された奴隷の9割以上がアフリカから直接入港したと言われている。西インド諸島からの奴隷はチェサピークの中で地理的に集中する傾向が見られた。ジェームズ川下流地区では、1730年代以前の奴隷は西インド諸島を経由して入ってきており、その後も、18世紀に西インド諸島から入った奴隷の4分の3はジェームズ川下流地区に到着したと言われている³⁵⁾。バルバドスやジャマイカでは、砂糖生産で大量の奴隷労働を必要としたため取引規模は膨大で、全人口の9割を超える黒人人口は男性偏重で自然増加が難しく、絶えず新しい奴隷を輸入し続ける必要があった。西インド諸島で売れ残った奴隷のほとんどが北米植民地向けに再輸出された。

こうした奴隷（refused slaves）が、ジェームズ川下流地区に入ってきたと考えられる。その後、この地区にビアフラやセネガンビア出身の奴隷が輸入されるようになり、部族的構成は大

³¹⁾ Walsh, “Chesapeake,” p. 150. アフリカの諸地域は以下のように分類できる。アフリカ大陸最西端のセネガル川・ガンビア川流域はセネガンビア（またはガンビア）と呼ばれ、その南がシエラリオネ、さらに南で現在のリベリア・象牙海岸のあたりはウィンワード海岸または穀物海岸と呼ばれた。その東側、現在の象牙海岸からガーナにかけては黄金海岸と呼ばれ、早くからエルミナなどの拠点で築かれ欧州各国が勢力を競った。さらにその東側、現在のトーゴ・ベナン・ナイジェリアの一部までがベニン海岸と呼ばれ、ナイジェリア東部からカメルーンにかけてはビアフラ海岸と呼ばれた。キャラバーはビアフラ海岸の一地名である。西中央アフリカ（アンゴラ）は現在のガボン・コンゴ・アンゴラ一帯を指す。Morgan, *Slave Counterpoint*, p.66の地図など参照。

³²⁾ Walsh, “Liverpool,” pp. 100-101.

³³⁾ ビアフラに強固な地盤を持っていたのはブリストル商人である。Richardson, “Bristol,” p. 43; Walsh, “Chesapeake,” p. 152.

³⁴⁾ 西インド諸島からの流入説はSusan Westbury, “Slaves of Colonial Virginia: Where They Came From,” *The William and Mary Quarterly* 42, 1985, pp. 228-37; Klein, *Middle Passage*, p. 122 など。Walshによればバージニアに到着した奴隷で西インド諸島から入ったのは17世紀中も7%ほどであった。Walsh, “Chesapeake,” pp. 144-145.

³⁵⁾ Westbury, “Analysing,” p. 244.

表4 チェサピーク湾岸地域に輸入された奴隷数 (単位: 人)

年	セネ ガンビア	シエラ リオネ	ウィンド ワード海岸 ・黄金海岸	ベニン 湾岸	ビアフラ 湾岸	西中央 アフリカ (アンゴラ)	マダガ スカル	出身地判別 可能な奴隷 合計	全 奴隷数
ヨーク川流域									
1698-1703年					117	92		209	1,620
1704-1718年		88	403	245	1,016			1,752	3,951
1719-1730年	330	82	1,318		5,108	659	742	8,239	10,849
1731-1745年	459		263		3,085	2,756		6,563	11,551
1746-1760年	421		491		1,649	947		3,508	4,098
1761-1774年	36		155					191	255
合計	1,246	170	2,630	245	10,975	4,454	742	20,462	32,324
ジェームズ川上流地区									
1704-1718年		42						42	92
1719-1730年									189
1731-1745年	790				738	172		1,700	3,217
1746-1760年	294	441	343		3,184	637		4,899	5,597
1761-1774年	734		1,470	339	1,074	2,035		5,652	6,622
合計	1,818	483	1,813	339	4,996	2,844	0	12,293	15,717
ボトマック川南部地区									
1704-1718年									105
1731-1745年	566							566	1,169
1746-1760年	80				197			277	277
1761-1774年	143							143	143
合計	789	0	0	0	197	0	0	986	1,694
ラバハノック川流域									
1704-1718年	610				203			813	813
1719-1730年			147		853		470	1,470	2,743
1731-1745年	1,040				129			1,169	3,157
1746-1760年	286	204			204	337		1,031	1,157
1761-1774年	440	398	838	189	105	126		2,096	2,412
合計	2,376	602	985	189	1,494	463	470	6,579	10,282
ジェームズ川下流地区									
1704-1718年									157
1719-1730年									94
1731-1745年	106				160			266	465
1746-1760年	184							184	545
1761-1774年	13		60					73	264
合計	303	0	60	0	160	0	0	523	1,525
バー ジニア (地区不明)									
1698-1703年					181			181	181
1704-1718年	467		117		1,364			1,948	4,915
1719-1730年	142					204		346	1,291
1731-1745年									640
1746-1760年	362		121		527	497		1,507	2,123
1761-1774年	143		396		254			793	883
合計	1,114	0	634	0	2,326	701	0	4,775	10,033
メリーランド									
1698-1703年									2,495
1704-1718年	261	110	278		202			851	2,244
1719-1730年		119	580					699	2,022
1731-1745年	597					256		853	2,566
1746-1760年	349	140	512		232	1,118		2,351	2,700
1761-1774年	1,574		500		100	325		2,499	4,861
合計	2,781	369	1,870	0	534	1,699	0	7,253	16,888

出所) Walsh, "The Chesapeake," pp. 166-169より作成。

表5 バージニア植民地に入港した奴隷総数と出身地比率（単位：％）

年	1718- 1726年	1728- 1739年	1712- 1720年代	1730 年代	1740- 1752年	1760- 1772年	1698- 1703年	1704- 1718年	1719- 1730年	1731- 1745年	1746- 1760年	1761- 1774年
	(1)		(2)				(3)					
奴隷総数（人）	8,400	5,818	11,211	7,644	2,876	3,557	390	4,555	10,055	10,520	11,406	8,948
セネガンビア	4	10	8	27	41	13	0	24	5	28	14	17
シエラリオネ	1	0	4	0	0	6	0	3	1	0	6	4
ウィンドワード 海岸・黄金海岸	20	5	14	4	8	31	0	11	15	3	8	33
ベニン湾岸	0	0	0	0	0	0	0	5	0	0	0	6
ピアフラ湾岸	60	44	57	33	30	0	76	57	59	39	51	16
西中央アフリカ (アンゴラ)	5	41	6	37	21	50	24	0	9	30	21	24
マダガスカル	9	0	11	0	0	0	0	0	12	0	0	0

出所) (1) Donnan, *Documents*, pp. 183-185, 188-204. (2) Minchinton et al, *Virginia Slave Trade Statistics*; Morgan, *Slave Counterpoint*, p. 63. (3) Walsh, "The Chesapeake," pp. 166-169.

変複雑なものになった。タバコ生産の中心地であるヨーク川流域やラパハノック川流域、後に発展するジェームズ川上流地区には西インド諸島を経由した奴隷はほとんど見られなかった³⁶⁾。西インド諸島を経由する船は奴隷貿易用に作られた奴隷船ではない場合が多く、一般商品や砂糖などの作物を運んだ船の中に奴隷が何人か含まれていた。そのため1隻あたりの奴隷数は少なく、18世紀中に西インド諸島からバージニアに入港した1隻あたりの平均奴隷数は10～12人であったと言われる。一方、アフリカからは1隻あたりの平均奴隷数が200人程であった³⁷⁾。

アフリカの特定の地域出身の奴隷が、新大陸の中でも一定の地域に集まる傾向があったこと

が近年多くの研究で言及されている。クラインやウォルシュのように、植民地とアフリカの特定の地域との結び付きは弱く、アフリカの異なる地域からの奴隷の流入はアフリカでの奴隷獲得状況によって決定し、プランターの希望とは関係ないと主張する研究もある一方、個別文書の記録や植民地社会の慣習などから、プランターの好みによって奴隷の出身地が偏る傾向があったことを主張する研究も増えている³⁸⁾。

既に多くの奴隷を所有する大プランターは特定の奴隷商人との取引が継続し、同じ業者から新たに奴隷を購入する際、現在所有している奴隷の出身地域からの購入を希望する場合が見られた。例えば、バージニアの有力者であった大プランターのカーター家は、セネガンビアや黄金海岸からの奴隷を好み、アンゴラから購入した奴隷が良くなかった経験から、アンゴラの奴隷をあからさまに拒否するようになった。このことは、カーター家の勢力が強かったラパハノック川流域の奴隷出身地の構成に少なからず影響があったと言われている³⁹⁾。奴隷の出身地域が集中する傾向は、バージニア植民地の相続の方

³⁶⁾ Refused slavesは「拒否奴隷」で、売れ残った奴隷、または行動などが問題視されプランターが所有を「拒否」して売却した奴隷を指す。Donald D. Wax, "Preferences for Slaves in Colonial America," *Journal of Negro History* 58, no. 4, Oct. 1973, pp. 376-379; Walsh, "New Findings," p. 14. ボトマック川南部地域も西インド諸島からの奴隷が多かったとされるが、Walshによると10%以下であった。

³⁷⁾ Walsh, "New Findings," p. 14. Westburyによると、西インド諸島からの船は1隻平均10人の奴隷、アフリカからの奴隷船は平均178人であった。Westbury, "Analysing," p. 242. Kleinによると、西インド諸島からの船はバージニアに奴隷を運んだ全船舶の64%を占め、1隻平均12人の奴隷を運び、アフリカからの奴隷船は全船舶の25%を占め、1隻の平均奴隷数が199人であった。Klein, *Middle Passage*, p. 124.

³⁸⁾ Walsh, "Chesapeake," p.140; Klein, *Atlantic Slave Trade*, pp. 174-175; Littlefield, *Rice and Slaves*. アフリカのディアスポラ研究については脚注5参照。

³⁹⁾ Walsh, "Chesapeake," pp. 152-153.

法にも影響を受けた。一般に個人資産は子の間で平等に分配されたが、バージニアでは長子(男子)相続を認める法律が制定されており、遺書の明記がなければ、長子が自動的に土地を相続し、他の相続権のある兄弟に奴隷の価値に相当する支払いをすれば全ての奴隷を一人で相続することが可能であったため、富裕層の相続は出身地が集中した奴隷が拡散することなく、引き継がれていった⁴⁰⁾。

同時代の記述を見ると、西中央アフリカのアンゴラ出身の奴隷はバージニアでもメリーランドでも好まれなかった。西インド諸島でも同じ傾向が見られたが、サウス・カロライナでは逆に受け入れられていた。西インド諸島ネビスの記録では、アンゴラやコンゴからの奴隷はアフリカで快適な気候の下、食糧も満たされていたため、新大陸では奴隷が怠惰になりやすく、過酷な労働に耐えられないと評価されていた。さらに、否定的な評価の要因の一つに、アンゴラからチェサピーク湾岸地域まで奴隷を運ぶのに必要とされた日数がある。このルートは大西洋奴隷貿易の中でも最も長いルートであったため、奴隷船上での死亡率が高く、到達しても伝染病を発症している、または衰弱しているなど問題のある奴隷が多かった。アンゴラとは対照的に、バージニアを含め多くの植民地で概して評価が高かったのが黄金海岸出身の奴隷であった。同時代のイギリス商人の文献ではキャラバー、コンゴ、アンゴラの奴隷は質が悪く、最も良い奴隷は黄金海岸の奴隷と言われた。アフリカで活動した商人の記録にも「あの海岸で最も良い奴隷が獲得できる」と黄金海岸からの奴隷を称賛し、その理由として「たくましく屈強で良く働き、厳しい条件下で生き抜く習慣を身につけている」、また「大変な暑さと食糧不足で体が鍛えられ」と言われた。黄金海岸に次いで

好ましいとされたのはセネガンビアからの奴隷であった。この奴隷は、砂糖プランテーションほど労働が過酷でない北米植民地に最適とされ、性格が社交的で陽気な気質を持つと言われた。カーター家の文書にはとりわけセネガンビアの奴隷がバージニア市場に最も適していると記されており、その考えはカーター家で代々受け継がれた⁴¹⁾。

(3) 輸入奴隷関税による規制

奴隷の輸入は植民地における作物の生産状況や、奴隷の人口動向などによって増減が見られたが、奴隷が輸入貿易の取引対象であったことから、関税を制定しそれを変動させることによって、入港数を操作することが可能であることを植民地政府は把握していた。制定された関税は安定した収入を確保するという一面もあったが、黒人人口を抑制する手段としても用いられた。イギリスは、北米植民地での奴隷貿易による利益は全奴隷貿易の中に占める割合としては少なかったことから、植民地政府の奴隷の関税政策に対して一貫した対応はとらず、法案に反対した回数も少なかった。バージニア植民地の奴隷市場を積極的に開拓しようと試みたりバプール商人50名以上が関税の引き上げに反対する嘆願書を提出したこともあったが、植民地時代を通してイギリス政府は植民地社会の経済的・社会的安定が目的の関税政策については寛容な姿勢を貫いた⁴²⁾。

植民地の関税法の特徴は、アフリカから直接入港する奴隷と、西インド諸島など他の植民地を経由して入港する奴隷とでは関税額が異なった点である。植民地時代を通して、他の植民地

⁴¹⁾Wax, "Preferences," pp. 391-393, 396-397.

⁴²⁾Donald D. Wax, "Negro Import Duties in Colonial Virginia: A Study of British Commercial Policy and Local Public Policy," *Virginia Magazine of History and Biography* 79, 1971, pp. 41-42. 本国政府が法制定に反対したのは1720年代、1760年代の数回のみであった。

⁴⁰⁾Walsh, "Chesapeake," p. 157; Walsh "New Findings," p. 19.

経由の奴隷はアフリカ出身の奴隷よりも5～10倍高い関税が課された。この理由は、西インドなどで一定期間滞在し、他の奴隷やヨーロッパ人との接触を経験した奴隷は、北米植民地でのプランテーション労働環境の中で勤勉性を失い、より反抗的な態度をとるようになると植民地人が考えたためであった。同時代の記録では、バージニアの奴隷商人は「西インド諸島からの奴隷は犯罪を犯し島外に売られた結果、バージニアにたどり着いた」と認識していると記述している⁴³⁾。

バージニア植民地は1699年から奴隷に対し少額の関税を徴収し始め、その財源は当初は奴隷輸入を制限するためではなく、知事公邸の改修や植民地議会議事堂の建築などに充てられた⁴⁴⁾。1699年の関税法では、年季奉公人の輸入は一人当たり15シリング、奴隷については一人当たり20シリングの関税を輸入者が支払うことが規定され、1700年代にもこれと同様の関税法が継続的に制定されている。1710年から1718年の間、新しい関税法が施行され奴隷一人当たりの課税は5ポンドに上昇した。このころから、関税を課す理由に、急増し集団化した奴隷の反乱に対する白人指導者層の恐怖心があった。特に1710年に少なくとも3つの郡にまたがる奴隷反乱計画が実行前に発覚し、その恐怖を実感した植民地政府はすぐに関税法で対策を講じた。当時の知事アレクサンダー・スポッツウッドは奴隷輸入増加への対策の必要性を認識し、5ポンドの関税が奴隷輸入をほぼ停止する効果があると考えた。同知事は、奴隷による社会不安だけでなく、奴隷購入による負債を抱えたプランターが増え、タバコの価格も低下傾向にあり、対策を取らずに奴隷を輸入し続けるのは植民地経済の

破綻につながると考えた⁴⁵⁾。

その後1720年代から1732年まで、一転して非関税で奴隷が入港し続けたため、輸入が増加した。この間、植民地政府は度々新関税法の制定を申請したが、奴隷商人の強い反対を受け、本国政府が拒否し続けた⁴⁶⁾。1732年関税法では、関税の支払いを輸入業者から購入者へと転換し、固定税率ではなく奴隷の価格に応じた従価方式による課税（5%）へと方針転換した。この5%の関税率は1754年まで継続し、1754年には10%、1755年にはフランスとの対立激化で貿易完全停止を狙い20%にまで引き上げられた。その結果、バージニアを避けて周辺植民地への奴隷輸入が増え、周辺からバージニアに奴隷が送り込まれる状況が生まれた⁴⁷⁾。1760年には10%に引き下げられたが、再度20%に引き上げようとした1767年の法案は本国政府によって破棄に追い込まれた。しかし2年後の1769年にはやはり20%にまで関税は引き上げられ、独立前の最後の法改正は1772年にアフリカからの奴隷は10%の関税、それ以外の植民地からの奴隷についてはそれまでの20%に加え、定額の5ポンドの付加関税が決定した。関税法制定に際しては大規模プランターと小規模農家との衝突が頻繁に起きた。輸入制限は植民地で大量の奴隷を所有するプランターにとっては奴隷の資産価値を上昇させることになるため、望ましい政策であったが、奴隷労働を増やしたい小規模なプランターやヨーマン農家、生産拡大を目指す農家には輸入制限につながる高関税は不評であった。輸入制限の結果、地域の奴隷市場は古くからの定住者で大量の奴隷を所有するプランターによって独占状態になり、奴隷が必要な若い世代は富裕プランターから購入せざるを得ない場合もあっ

⁴³⁾Wax, "Preferences," pp. 377-389. 南部植民地だけでなく、ロード・アイランドやニュー・ジャージーなど北部植民地も西インド諸島からの奴隷には差別的な高関税をかけた。

⁴⁴⁾Wax, "Negro Import Duties," p. 32.

⁴⁵⁾Wax, "Negro Import Duties," pp. 33-34.

⁴⁶⁾Wax, "Negro Import Duties," pp. 33-36, 40.

⁴⁷⁾周辺植民地で輸入された奴隷を、プランターが個人使用のためにバージニアに移動することには関税がかからなかった。Wax, "Negro Import Duties," p. 38.

た⁴⁸⁾。

バージニア植民地は18世紀初頭から1735年ごろまで奴隷輸入が増え続け、その後は奴隷の自然増加で徐々に輸入数が減少した。奴隷需要と奴隷の到着地はタバコ生産の品種や生産規模によって異なり、奴隷商人の活動領域も商人の出身地や参入時期によって異なった。また、バージニアに到着した奴隷の大半はアフリカ出身で、ビアフラ、セネガンビアなどの地域からの奴隷が多く送り込まれたことが分かった。18世紀半ば以降バージニアでの奴隷貿易は衰退し、西インド諸島、サウス・カロライナ植民地に比べて重要度の低い取引先になった。バージニアが独立後に州として奴隷貿易停止の道へ進んだ背景にはこうした事態が存在した。さらに独立後には、奴隷が飽和状態となっていた沿岸のプランテーションから、開拓が進む西部に余剰奴隷を送り出す国内取引システムがうまれることになった。

2. サウス・カロライナ植民地の発展と奴隷貿易

(1) サウス・カロライナ社会の形成

北米植民地の中でもサウス・カロライナ植民地、特にその主要都市チャールストンの白人エリート層ほど、本国イギリスとの関係を重視し、イギリスのジェントリ・スタイルを模倣した裕福な植民地人はなかったと言われる⁴⁹⁾。サウス・カロライナ植民地はプランテーションでの換金作物生産とその輸出を経済的基盤とし、北米植

民地で最も黒人人口密度の高い奴隷制社会(“slave society”)を成立させ、イギリス重商主義の拠点の一つとして成長した⁵⁰⁾。

サウス・カロライナ植民地は1670年に建設され、植民地建設の中心となったのは、バルバドス植民地からのイギリス系移民であった⁵¹⁾。1680年代には1,000人ほどの白人入植者が確認できるが、そのうち300~400人はバルバドスからの移民と推測されている。なお、植民した年から既に奴隷の存在が確認されており、翌年にはバルバドスから、さらに1672年にはアフリカのキャラバーからの奴隷を運んだ船が到着した記録がある⁵²⁾。

サウス・カロライナは早くから人口に占める黒人の割合が高かった(表6)。黒人人口比率の上昇を受けて、1690年から奴隷法制定に向けての動きが見られ、1696年にはバルバドスの1688年奴隷法をモデルとした奴隷法が制定された。この法は黒人奴隷の法的身分を売買の対象となる個人資産と明記した。バージニアの奴隷法から約30年遅れて、18世紀初頭までにサウス・カロライナでは奴隷は遺産目録上、個人資産とされ、売買や担保の対象となったのである。1708年には黒人人口がサウス・カロライナ人口の半数を超え、その後1740年の新奴隷法では罪

⁵⁰⁾ “slave society”についてはIra Berlin, *Many Thousands Gone: The First Two Centuries of Slavery in North America*, Cambridge, MA: Harvard University Press, 2000, Section II “Slave Societies: The Plantation Generations” 参照。

⁵¹⁾ Olwell, *Masters*, p. 20; Glover, *All Our Relations*, chap. 1.

⁵²⁾ S. Max Edelson, *Plantation Enterprise in Colonial South Carolina*, Cambridge, MA: Harvard University Press, 2006, p. 43; Glover, *All Our Relations*, pp. 4-5; Elizabeth Donnan, “The Slave Trade into South Carolina Before the Revolution,” *The American Historical Review* 33, no.4, July, 1928, p. 804; W. Robert Higgins, “Charleston: Terminus and Entrepot of the Colonial Slave Trade,” in Martin L. Kilson, and Robert I. Rotberg eds., *The African Diaspora*, Cambridge, MA: Harvard University Press, 1976, p. 122.

⁴⁸⁾ Wax, “Negro Import Duties,” pp. 39-40.

⁴⁹⁾ Robert Olwell, *Masters, Slaves & Subjects: The Culture of Power in the South Carolina Low Country*, Ithaca, NY: Cornell University Press, 1998, p. 5; Lorri Glover, *All Our Relations: Blood Ties and Emotional Bonds among the Early South Carolina Gentry*, Baltimore, MD: The Johns Hopkins University Press, 2000. 「ローカントリー」はサウス・カロライナから南のジョージアにかけての沿岸地域一帯の総称。

表6 サウス・カロライナとチャールストンの人口推計（単位：人）

年	サウスカロライナ						チャールストン		
	合計	白人	黒人	過去10年間のサウスカロライナへの推計輸入奴隷数	黒人人口比率(%)	全奴隷比 アフリカ 生まれ 比率(%)	合計	白人	黒人
1670年	200	170	30	0	15	不明	a	a	a
1680年	1,200	800	400	不明	33	不明	500	a	a
1690年	3,900	2,400	1,500	不明	38	不明	1,500	1,000	500
1700年	5,704	3,260	2,444	不明	43	50	2,500	1,500	1,000
1710年	10,883	5,115	5,768	400	53	67	3,000	2,000	1,000
1720年	18,393	6,525	11,868	3,300	65	58	3,000	2,000	1,000
1730年	30,000	10,000	20,000	9,200	67	63	3,000	2,000	1,000
1740年	59,155	20,000	39,155	17,000	66	66	5,000	2,500	2,500
1750年	65,000	25,000	40,000	1,600	62	42	6,000	3,000	3,000
1760年	89,740	36,740	53,000	18,800	59	39	9,000	4,500	4,500
1770年	124,244	49,066	75,178	18,700	61	35	12,000	6,000	6,000

出所) サウスカロライナの1670～1760年までは、Coclanis, *Shadow of a Dream*, p. 112を参照。1770年のみMorgan, *Slave Counterpoint*, p.61参照。チャールストンについては、C. D. Clowse, *Measuring Charleston's Overseas Commerce, 1717-1767: Statistics from the Port Naval Lists*, Washington D.C.: University Press of America, 1981, p. 30より作成。

を犯した奴隷に対しては白人とは異なる厳罰を規定するなど、奴隷に対する抑圧体制は一層強まった⁵³⁾。

黒人人口増大を懸念した植民地政府は様々な対策を試みるが、その一つが白人移民の誘致であった。1698年に白人誘致政策を開始し、1712年には奴隷反乱への脅威からプランテーションでは10人の黒人に対して1人の白人を配置することを規定した法律が制定された。内陸インディアンとのヤマシー戦争が1715年に終結すると、白人誘致は本格化した。政府は奴隷を購入できない貧しい白人移民居住地がフロンティアの対インディアン緩衝地帯になることを期待して内陸に土地を準備し、1730年代にはプロテスタント系白人貧農用の郡区まで作ったが、あまり効果はなかった。初期のサウス・カロライナは収益になる出荷物に恵まれず、マラリアや黄熱病

が発生しやすい湿潤な気候で白人の誘致は容易ではなかった⁵⁴⁾。1750年代以降も植民地議会は貧しいプロテスタントを積極的に誘致し続けたが、白人移民数は逆に減少した。その頃には既に肥沃な土地には大プランテーションが建設され、主要作物であった米作向けの良質の土地や設備の準備・購入には少なくとも2,000ポンド必要であるといわれた⁵⁵⁾。

サウス・カロライナ植民地を含むロウカントリーの奴隷人口が自然増加し始めたのは1740-50年代であった。チェサピーク湾岸地域と比べると、輸入奴隷の男女比の偏りや過酷な気候条件のため、自然増加実現は遅かった。自然増加がみられるようになると黒人の割合は増え続け、1740年に黒人と白人の比率は2対1であったの

⁵³⁾ C. D. Clowse, *Economic Beginnings in Colonial South Carolina, 1670-1730*, Columbia: University of South Carolina Press, 1971, pp. 106-7; Eugene Sirmans, "The Legal Status of the Slave in South Carolina, 1670-1740," *The Journal of Southern History*, Vol. 28, no. 4, Nov. 1962, pp. 462-473.

⁵⁴⁾ Edelson, *Plantation Enterprise*, p. 52; Higgins, "Charleston," p. 117. Leila Sellers, *Charleston Business on the Eve of the American Revolution*, Chapel Hill: University of North Carolina Press, 1934, p. 120. 1714年には黒人人口の増加を懸念して12歳以上のアフリカからの輸入奴隷に付加税が課されている。"Act for Governing Negroes," 1714, Donnan, *Documents*, p.260.

⁵⁵⁾ Olwell, *Masters*, p. 31.

が、1770年には3.5対1になった⁵⁶⁾。

このようにサウス・カロライナは18世紀には黒人人口が過半数を占める植民地となり、18世紀半ばには北米植民地で自由白人一人当たりの所有資産額が最も高い裕福な植民地になっていた。これは奴隷価格の上昇による奴隷資産価値の増加によるところが大きい⁵⁷⁾。ジョーンズが分析した1774年の遺産目録記録によると、チャールストン地区の自由白人の一人当たりの平均資産額は416ポンド・スターリングで、中部植民地の約8倍、ニューイングランド植民地の10倍以上であった。サウス・カロライナでの全資産中の奴隷資産の比率は1720年代には資産価値の45%、1750年代には50%を超えていた⁵⁸⁾。チャップリンの10年ごとの算出では、奴隷は遺産目録で確認できる財産の70%以上を占めていた。独立直前には、ローカントリーの白人は他の北米植民地の6倍以上の資産を持ち、1774年の平均資産額に占める奴隷資産の価値は68%にも上った。奴隷を除いても、サウス・カロライナの自由白人の一人当たりの資産は中部植民地の自由人口の平均的資産の4倍以上であった⁵⁹⁾。

⁵⁶⁾ オルウェルは1740年代に自然増加が始まったとするが、マンコーラは18世紀前半までは植民地奴隷人口は死亡率が出生率を上回り、奴隷人口の増加には奴隷の継続的な輸入が必要であったと主張している。バージニアでは早い場所では1710年代から自然増加が見られた。Morgan, *Slave Counterpoint*, p. 81; Orwell, *Masters*, p. 30; Peter C. Mancall, Joshua L. Rosenbloom, and Thomas Weiss, "South Carolina Slave Prices, 1722-1809," NBER Working Paper Series, Historical Paper 123, 2000. 大西洋奴隷貿易における奴隷の男女比については Klein, *Atlantic Slave Trade*, p. 32; Morgan, *Slavery and the British Empire*, p. 161.

⁵⁷⁾ Alvin Rabushka, *Taxation in Colonial America*, Princeton, NJ: Princeton University Press, 2008, pp. 697-698; Mancall, "Slave Prices," pp. 2-4.

⁵⁸⁾ Coclanis, *Shadow of a Dream*, p. 87.

⁵⁹⁾ Alice Hanson Jones, *Wealth of a Nation to Be: The American Colonies on the Eve of the Revolution*, New York: Columbia University Press, 1980; Coclanis, *Shadow of a Dream*, p. 125; Joyce E. Chaplin, *An Anxious Pursuit: Agricultural Innovation and Modernity in the Lower South, 1730-1815*, Chapel Hill: University of North Carolina Press, 1996, pp. 367-368.

チャールストンはフィラデルフィア以南で唯一都市と呼べる場所であり、イギリス重商主義体制の拠点の一つとして栄えた⁶⁰⁾。植民地期には多くの奴隷を市内に抱え、その数は1760年までに人口の半分を超えた⁶¹⁾。1775年の時点でチャールストンの人口は1万2,000人に上り、南部ではメリーランドのボルチモア、バージニアのノーフォークが続いたが、その両都市の人口は半分以下であった。プランテーション生産による輸出経済が定着し、繁栄と拡大が続くようになるとプランターの多くはプランテーションから離れて不在農園主としてチャールストンに住み、都市の娯楽や社交に興じた⁶²⁾。

初期のサウス・カロライナには有益な換金作物がなかったが、18世紀になると内陸のインディアンとの取引によって栄えた鹿皮貿易、また恵まれた森林資源を利用した海軍軍需品産業が利益をもたらすようになった。植民地からの輸出入は関税の対象となり、輸出関税の大半は鹿皮や皮製品、18世紀以降大幅に輸出を伸ばした米から得られた。輸入関税の財源となったのは一般商品 (general merchandize)、ラム酒と奴隷であった。こうした輸出入関税は主に植民地政府の防衛費、要塞の建設、教会建設・維持費、聖職者への給与などにあてられ、緊急に多額の費用が必要な場合は植民地議会が定めた税金である一般年間課税から支払われた。裕福な植民地であったサウス・カロライナの課税は高く、平和時の白人への課税は他のプランテーション植民地より5～15倍高かった⁶³⁾。

⁶⁰⁾ Higgins, "Charleston," pp. 116-117.

⁶¹⁾ Kenneth Morgan, "Slave Sales in Colonial Charleston," *English Historical Review* 113, no. 453, Sept. 1988, p. 907; Sellers, *Charleston Business*, p. 12.

⁶²⁾ Orwell, *Masters*, p. 37.

⁶³⁾ Rabushka, *Taxation*, pp. 702-703, 706; Donnan, *Documents*, p. 260 fn; Sellers, *Charleston Business*, p. 128. サウス・カロライナ植民地の税制について次も参照。Robin L. Einhorn, *American Taxation, American Slavery*, Chicago, IL: University of Chicago Press, 2006, pp. 93-106.

また、イギリス議会はイギリス製造業支援と海上交通の優位性の保護などの目的から、植民地の農作物に対する補助金政策を採り、インディゴ、亜麻、麻、タバコ、絹、ワイン、木材、海軍軍需品産業などがその対象となった。なかでもサウス・カロライナの重要な産業として成長したのは、初期の海軍軍需品産業と1740年代以降多大な利益を上げたインディゴであった⁶⁴⁾。

（2）サウス・カロライナの輸出産業の発展

大西洋貿易体制下のサウス・カロライナでは換金作物の輸出に対し、イギリスから繊維製品やその他製造品、アフリカからの奴隷、さらに西インド諸島からラム酒、砂糖と奴隷が輸入され、貿易の均衡が図られた。加えて、北部植民地から小麦粉などの食糧、マデイラやカナリア諸島から塩やワインも輸入していた⁶⁵⁾。

サウス・カロライナ経済は1720年以前と、1720年から独立戦争までの間の2期に分けてその特徴を分析することができる⁶⁶⁾。初期は特定の作物に恵まれない時期が続いたが、やがて鹿皮と海軍軍需品の輸出が1715年以降増加し、それに伴って奴隷輸入数も増加傾向を示した。特に鹿皮は1690年から1705年の間、最も利益を上げた商業活動であったが、わずかな関税がかかるのみでイギリスからの規制もなかった。海軍軍需品も補助金を受けて安定した輸出が見られた⁶⁷⁾。

1720年代以降、サウス・カロライナの主要輸出品となり、地域経済発展の土台となったのは米の生産であった。米は1704年に列挙品目に指定されたことにより、その市場はイギリスとその植民地に限定された⁶⁸⁾。米の輸出は市場制限などの輸出条件が徐々に緩和され⁶⁹⁾、1717-20年には年間8,000バレルほどの生産であったのが、1726-30年には25,000バレルにまで拡大し、1730年代の奴隷輸入増加の要因となった。その後、1740年代は奴隷輸入が高関税政策によって停止状態になり、ヨーロッパでの戦争（ジョージ王戦争）などの影響で米輸出は停滞した⁷⁰⁾。さらに1752年に植民地期最大のハリケーンが直撃したため翌年、急激な減収になったが、その後は独立戦争までの約25年間、米輸出による繁栄の時代になった。輸出額はこの間2倍以上に増え、輸出拡大は七年戦争中に輸送費が急増したにもかかわらず1760-70年代も継続した。1760年代にはイギリス帝国外の市場が開放され、1770年代初頭には年間平均40万ポンド以上の収益を上げ、20年前の3倍にもなった。この米輸出による収入の増加は、1760年代の奴隷輸入の

⁶⁸⁾当初米は直接ヨーロッパ大陸にも出荷されたが、生産が増える予想から税収確保を目論んだ本国が列挙品目に指定した。Clowse, *Economic Beginnings*, pp. 132-139. 列挙品目に指定されると、輸出の7～8割がヨーロッパ大陸に再輸出された。1721年の貿易省の記録では、1713年から1717年までにイギリスに入ってきた米の70%近くが北ヨーロッパのオランダやドイツに、10%は南ヨーロッパのスペインやポルトガルに再輸出され、残り20%は本国内で消費された。Kenneth Morgan, "The Organization of the Colonial American Rice Trade," *The William and Mary Quarterly* 52, no. 3, July, 1995, pp. 436-438.

⁶⁹⁾Sellers, *Charleston Business*, pp. 53-54.

⁷⁰⁾米価の変動は激しく、当時の商人ロバート・プリングルは「毎週変動する」、同じく商人のピーター・マニゴルトらは「1日に3回価格が変わり、24時間以内に10シリング変動することもある」と指摘している。Peter Manigault to Daniel Blake, March 10, 1771, Peter Manigault Letterbook; Henry Laurens to Ormandy and Shurner, March 8, 1770 in Philip May Hamer et al eds., *Papers of Henry Laurens*, vol. 7, Columbia: University of South Carolina Press, 1980, p. 246.

⁶⁴⁾Sellers, *Charleston Business*, p. 31.

⁶⁵⁾Morgan, *Slavery and the British Empire*, chap. 3.

⁶⁶⁾R. C. Nash, "The Organization of Trade and Finance in the Atlantic Economy: Britain and South Carolina, 1670-1775," in Jack P. Greene et al eds., *Money, Trade and Power: The Evolution of Colonial South Carolina's Plantation Society*, Columbia: University of South Carolina Press, 2001, p. 75. 前半期では輸入超過が続く植民地政府は植民地からの「金銀の正貨の流出」を懸念していた。Donnan, *Documents*, p. 259.

⁶⁷⁾鹿皮についてはGlover, *All Our Relations*, pp. 89-90, Clowse, *Economic Beginnings*, pp. 116-120; 海軍軍需品についてはLewis C. Gray, *History of Agriculture in the Southern United States to 1860*, vol. I, Washington D.C.: Carnegie Institute, 1933, pp. 151-157参照。鹿皮の関税額は皮1枚当たり数ペンス程度で1691年の法ではなめし加工されていない鹿皮1枚につき3ペンスの課税、ビーバーやカワウソなど他の動物の皮も課税された。

増加に直接影響した⁷¹⁾。

サウス・カロライナでは1740年代の米生産の不況期に、インディゴの生産を開始した。インディゴは米ほど高張らず、繁忙期が米の生産サイクルと重ならない利点があり、年間労働日数も短く、米との補完性があった。1748年に列挙品目に指定され、イギリス帝国内に輸入されたサウス・カロライナ産以外のインディゴに対しては関税が課されたことから、イギリスの繊維業者が用いる染料の大半を供給することができた上、ポンド当たり6ペンスの補助金が付くことも生産を加速した⁷²⁾。18世紀半ば以降は米とインディゴの生産を軸に植民地経済は発展し、それは奴隷貿易の展開と密接に絡んでいた。

(3) 奴隷貿易の推移：取引への規制と取引の実態

i. サウス・カロライナへの奴隷の入港

サウス・カロライナは大西洋奴隷貿易全体でみると大きな輸入先ではなかったが、植民地期全体で合計9万人以上の奴隷が入港し、1752-65年の間はイギリス奴隷貿易の6.5%、1730年代と1769-74年までの間は9%を占め、重要な入港地になっていた⁷³⁾。

⁷¹⁾ 1766-68年の間に課された奴隷輸入禁止関税の期間と1770年および1775年の政治的要因による奴隷輸入禁止期間は奴隷輸入が減少する。David Richardson “The British Slave Trade to Colonial South Carolina,” *Slavery and Abolition* 12, no. 3, Dec., 1991, p.134; Olwell, *Masters*, p. 32; Matthew Mulcahy, ““Melancholy and Fatal Calamities”: Disaster and Society in Eighteenth-Century South Carolina,” in Greene, *Money, Trade and Power*, pp. 278-298. 18世紀の間、米の耕作方法の改良により生産性は上昇し、特に1720年代以降、灌漑技術による湿地帯の開発が進んだことが生産拡大に貢献した。詳しくはChaplin, *Anxious Pursuit*, chap.7参照。北米からの米は8割以上がチャールストンから輸出された。Morgan, “Organization,” p. 434.

⁷²⁾ Morgan, “Organization,” p. 432; R. C. Nash, “South Carolina Indigo, European Textiles, and the British Atlantic Economy in the Eighteenth Century,” *The Economic History Review* 63, no.2, 2010, pp. 362-392.

⁷³⁾ Richardson, “Slave Trade,” pp. 127-128.

イギリス商人による奴隷貿易の展開は、バージニアと似た経緯をたどり、植民地期初期においては、ロンドンとブリストル商人が取引を支配した。サウス・カロライナに入港したイギリス船の資料では、1748年まではブリストル船が59%を占め、奴隷を15,600人輸送し、ロンドン船は40%で9,150人を輸送した。しかし、18世紀半ば以降、両港の独占的地位はリバプールの台頭で崩れ、1749年から1765年にかけてリバプールとランカスター、プールが半分以上の奴隷を輸送し、プールがのちに奴隷貿易から撤退すると、独立戦争直前にはリバプールとランカスターで半分以上の奴隷を輸送した⁷⁴⁾。

ii. 入港数の推移

チャールストンに入港した奴隷数は海軍局の船舶リスト、財務局の関税記録や同時代の新聞などから導き出せる(表7)。1705-75年の間に約9万3,000人の奴隷がアフリカから直接、または西インド諸島を経由してサウス・カロライナに入港しており、18世紀前半に約3万5,000人、1750年から1775年の間に約5万8,000人が到着した。これに対し、バージニアは1700年から1775年の間に約7万5,000人を輸入していた。サウス・カロライナの輸入数は独立前の25年間ではバージニアよりも約4万人も多く輸入した⁷⁵⁾。

奴隷入港数の推移をみると、全体の傾向として1725年以前は少なく、30年代に急増し、40年代に極端に後退した。その後50年代から60年代前半にかけて回復し、独立戦争前に急増している。1730年以前に輸入された奴隷は主に海軍軍

⁷⁴⁾ 1714-75年の間に到達したイギリス船の内訳はブリストル36%、ロンドン28%、リバプール25%、ランカスター8%、プール3%でハルとホワイトヘイブンからも1隻ずつ確認されている。Richardson, “Slave Trade,” pp.128-129. リバプールの取引については脚注27参照。

⁷⁵⁾ 1702-75年の間にジャマイカには約50万人の奴隷が送り込まれている。Morgan, “Slave Sales,” pp. 905-906.

表7 チャールストンへの奴隷入港数（単位：人）

年	人数
1706-1709年	206
1710-1714年	955
1715-1719年	1,873
1720-1724年	2,351
1725-1729年	6,678
1730-1734年	8,160
1735-1739年	12,487
1740-1744年	1,113
1745-1749年	867
1750-1754年	6,362
1755-1759年	9,413
1760-1764年	9,598
1765-1769年	11,762
1770-1775年	20,967

出所) Donnan, *Documents*, pp.235-470; Wood, *Black Majority*, p. 151; Richardson, "Slave Trade," pp. 170-172; および Records of the Public Treasurer of South Carolina, 1735-1775 (SCDAH) より作成

需品生産に使われ、1710年代後半はこの海軍軍需品と鹿皮輸出の成長による奴隷輸入増加と見てよい。1720年代以降は米の輸出が本格化する時期であり、それに合わせて奴隷輸入も増加したと推測できる⁷⁶⁾。

アフリカでの奴隷供給・奴隷獲得状況は新大陸の奴隷輸入数全体に大きく影響したが、サウス・カロライナに到着した奴隷数を左右したのは、他の植民地、とりわけ西インド諸島における奴隷需要であった。巨大な奴隷市場を形成した西インド諸島における奴隷売却の状況は砂糖生産の好不況と連動していた。1730年代にサウス・カロライナの奴隷輸入数が増加したのは、1730-33年の砂糖不況によって西インド諸島の奴隷輸入が減少し、その分、サウス・カロライナへ奴隷が多く流入したと考えられる。1740年代の奴隷輸入の激減は、のちに詳しく述べる奴隷の反乱と関税法の強化が影響しており、1740年代後半はヨーロッパでの戦争により米輸出が

低調であった。それに加えて、1748年以降、西インド諸島において砂糖価格の回復により奴隷需要が増加し、サウス・カロライナに十分奴隷が輸送されなかったことも一要因と考えられる⁷⁷⁾。また18世紀半ばになると米作地が内陸にも拡大し、隣接するジョージアやノース・カロライナ植民地でも米作・海軍軍需品生産が増加し始めた。チャールストンが地域の奴隷輸入の中心であったため、一部の奴隷は近隣植民地にも送られたことも、独立戦争前10年間のサウス・カロライナの奴隷輸入増加に貢献した⁷⁸⁾。

iii. 関税法の制定と効果

サウス・カロライナ植民地における関税政策には収入確保の目的もあったが、主たる目的は奴隷人口の抑制にあった。植民地議会は、1703年に輸入奴隷に対する最初の関税法を制定している。18世紀初頭には既に黒人人口が過半数を超えていたが、増え続ける黒人人口は白人指導者層にとって社会不安をもたらすものとみなされ、その恐怖心から輸入規制の目的で関税法が制定された⁷⁹⁾。

輸入関税は奴隷の体格に応じて決定され、4フィート2インチ以上の奴隷が最も高い関税の対象となった。サウス・カロライナでも西インド諸島など他の植民地を経由した奴隷に関しては、バージニアと同じ理由で、アフリカから直

⁷⁷⁾ ジャマイカは周辺植民地への奴隷再輸出の拠点となっていたため、西インドのスペイン領やフランス領植民地の奴隷取引状況も、ジャマイカの奴隷需要に影響を及ぼした。Richardson, "Slave Trade," p. 131.

⁷⁸⁾ チャールストンから植民地外に送られた奴隷は入港数の8%, 約7,000人であった。植民地時代を通してチャールストンからジョージアに入った奴隷は約3,500人。ジョージアは1760年代に奴隷輸入を開始した。Morgan, "Slave Sales," p. 911. 植民地外に奴隷が送られると、関税の4分の3が払い戻された。Sellers, *Charleston Business*, p.134.

⁷⁹⁾ 1721年の関税法では10歳以上の奴隷は10ポンド、それ以下は5ポンドと規定され、他の植民地に6か月以上いた奴隷は50ポンド、6か月以内なら30ポンドの付加税がついた。Donnan, *Documents*, p. 267 fn.

⁷⁶⁾ Stephen G. Hardy, "Colonial South Carolina's Rice Industry and the Atlantic Economy: Patterns of Trade, Shipping, and Growth," in Greene, *Money, Trade and Power*, pp. 112-113.

接輸入された奴隷よりは関税が通常の5, 6倍高かった⁸⁰⁾。植民地期のアフリカからの奴隷の平均関税額は10ポンドであったが、他の植民地に6カ月以上いた奴隷は通常の関税に加えて50ポンドの付加税が課された。しかし、個人で使用するために奴隷を輸入する場合や、到着後6カ月たっても売却されない奴隷に対しては、課税されなかった。こうした政策の結果、サウス・カロライナに入った奴隷の大半が直接アフリカから輸入された⁸¹⁾。

奴隷入港数は1740年代に激減していることが表7で確認できる。これは1740年に制定された関税法が輸入奴隷に対して極端に高額の関税を課し、事実上輸入停止関税となったからである。この規定は、前年の1739年にサウス・カロライナで植民地期最大の奴隷反乱が発生したことへの対応であった。ストノ反乱と呼ばれるこの反乱は、チャールストンからセント・オーガスティンに向かうストノ川流域で、60人ほどの奴隷集団が白人を殺害しながら家屋や農場を破壊し、計39人が犠牲となった。反乱は最終的に軍によって鎮圧された⁸²⁾。ストノ反乱は黒人と白人の人

口比率が2対1に近い社会の危険性を知らしめ、この不均衡を解消する必要性を白人に実感させた。この反乱の結果、従来の奴隷法がさらに強化されただけでなく、翌1740年関税法によって、1741年7月から1744年7月までの間、通常の10倍の関税を制定し輸入を事実上停止し、他のアメリカ植民地から入ってきた奴隷については付加税としてさらに50ポンド課せられた⁸³⁾。

ストノ反乱後の輸入関税政策は植民地期の奴隷輸入制限策としては最も効果的であった。関税収入は1739年の18,605ポンドから40年の6,920ポンド、その後3年間はそれぞれ100ポンド、375ポンド、0ポンドと激減した。この関税法が失効した1744年には5,530ポンドとなるが、45年には105ポンドに減り、46年に同関税法は5年延長されることが決定され、47, 48年には関税収入は再び減少した⁸⁴⁾。

関税と戦争で不況が長引くが、1748年に新たな換金作物となるインディゴに本国から補助金が出されることが決定すると、奴隷需要は高まり、49年には輸入が回復して関税収入も4,375ポンド、翌年には7,017ポンドにまで上昇した。しかし全体でみると、1741年から52年までの奴隷輸入数は1万6,000人以下にとどまった。戦争終結による輸出回復から奴隷需要が増加すると、1752年に輸入停止措置の関税法は撤回された⁸⁵⁾。その後、1750年代から60年代前半にかけて奴隷輸入は継続するが、1763年から64年にかけて、奴隷輸入が超過傾向になり、プランターの借入が増加したことから、取引制限を目的とした高関税が制定された。さらに1760年代以降、

⁸⁰⁾ Higgins, "Charleston," p. 121; Sellers, *Charleston Business*, p. 128-129. 4フィート2インチより小さい奴隷は、3フィート2インチ以上なら5ポンド、それ以下は2.5ポンドと課税額は低下した。Donnan, *Documents*, pp. 296-297.

⁸¹⁾ アフリカから直接入った奴隷の割合は85%以上といわれる。Richardson, "Slave Trade," p. 129; Sellers, *Charleston Business*, p. 128. 1761-66年はアフリカからの奴隷は非関税であったが、西インド諸島ではなく、アフリカからの奴隷であることを示す証明書の提示が奨励された。Robert Pringle to Gedney Clarke (Barbados), May 6, 1744, Edgar, *Letterbook*, vol. 2.

⁸²⁾ ストノ反乱についてはPeter H. Wood, *Black Majority: Negroes in Colonial South Carolina from 1670 through the Stono Rebellion*, New York: Knopf, 1974, pp. 308-326; Peter Charles Hoffer, *Cry Liberty: The Great Stono River Slave Rebellion of 1739*, New York: Oxford University Press, 2010. 反乱を起こした奴隷のうち44人が処刑された。その後に制定された「奴隷法は従来のものより一層強化され、プランテーション外の奴隷の一切の動きはプランターの監視のもとにおかれた。Edelson, *Plantation Enterprise*, p. 10.

⁸³⁾ Olwell, *Masters*, p. 52.

⁸⁴⁾ Rabushka, *Taxation*, p. 708. ロバート・プリングルは「(関税失効後の) 最初の積荷はかなりの利益をあげるであろう」と予測している。Robert Pringle to Edward Pare (Barbados), May 5, 1744, Edgar, *Letterbook*, vol. 2.

⁸⁵⁾ Rabushka, *Taxation*, p. 708. 1740年代に奴隷輸入は減少するが、奴隷数自体は自然増加も見られるようになり、減少しなかった。

本国との政治的対立が加速していく中、1770年と75年には奴隷輸入を禁じる決議がなされた⁸⁶⁾。

iv. 奴隷の出身地

サウス・カロライナに入ってきた奴隷の出身地域に関しては、これまでいくつかの研究がある⁸⁷⁾。まず、バージニア同様、西インド諸島を経由して入った奴隷については好まれなかった⁸⁸⁾。奴隷のアフリカの出身地の中では、植民地期後半になるとキャラバーとビアフラの奴隷は小柄な体格の問題や、米作に不向きという評判で好まれなくなった。さらに、アンゴラを除く、黄金海岸より東側地域で購入された奴隷については勤勉性を欠き、自殺率が高いという理由から購入を避ける傾向にあった⁸⁹⁾。一方、セネガンビア、黄金海岸・ウィンドワード海岸、アンゴラ出身の奴隷は評判がよく、中でもガンビア川沿い出身の奴隷が最も好まれた。サウス・カロライナの奴隷商人であった有力者ヘンリー・ローレンスは「ガンビアと黄金海岸が最も好まれ、次いでウィンドワード海岸、アンゴラ」が

続くと明記している⁹⁰⁾。18世紀半ばまではアンゴラ出身の奴隷が多かったことが表8で確認できる。1730年から1744年の間にチャールストンに到着した奴隷のうち、アンゴラ出身が73.7%にも上った。セネガンビア出身の奴隷が増えるのは1750年代以降であり、黄金海岸は全期間を通して決して高い割合ではなかった。同時代のサウス・カロライナの新聞上に宣伝された奴隷船入港の情報ではセネガンビア出身の奴隷が当初から多い。これは、一部の奴隷船しか宣伝を出していないこと、特に好まれるセネガンビアや黄金海岸からの奴隷船は宣伝を出すことが多かったことから、差が生じたと考えられる。また、紙上に宣伝された西インド諸島経由の奴隷船も、実際の割合より高かった。これは、西インド諸島経由の船であっても、アフリカの好まれる出身地の奴隷を運んでいる場合や、技能を持つなど利点がある場合は宣伝を出し、西インド諸島からの奴隷の否定的な印象を拭う目的もあったと考えられる⁹¹⁾。奴隷売却の宣伝は、奴隷数、出身地、売却の場所と時間、さらに西インド諸島を経由した場合は西インド諸島から何日かけて到達したかを記していることが多かった。奴隷を売却する商人はイギリス商人の代理人として販売を委託され、彼らは奴隷を最も高い価格で売り、取引をなるべく迅速に行い、確実に代金を受け取って送金する必要があった⁹²⁾。

⁸⁶⁾ Sellers, *Charleston Business*, pp. 128-130. 1766年からの3年間に輸入された奴隷は一人につき100ポンド付加税がかかり、合計110ポンドとなり事実上の輸入禁止関税となった。そのため1760年代後半から70年代にかけての奴隷輸入数は激しく変動した。

⁸⁷⁾ Littlefieldはプランターの出身地の好みについて言及している。Littlefield, *Rice and Slaves*, chap. 1.

⁸⁸⁾ Henry Laurens Papersに西インド諸島からの奴隷への偏見についての記述が多くある。John Hopton to James Burnett (Jamaica), January 22, 1772; Donnan, *Documents*, p. 443など。Higgins, "Charleston," p. 128; Sellers, *Charleston Business*, pp. 137-139も参照。

⁸⁹⁾ キャラバーとビアフラ出身の奴隷 (biteと呼ばれた) は最も避けられた。対照的に、バージニアではビアフラ出身の奴隷が大半を占め、アンゴラは好まれなかった。ヘンリー・ローレンスは「18歳から25歳までの背の高い男性で、キャラバー出身以外が最も良い価格をつける」と取引先に知らせ、「16, 17歳以上のキャラバー出身の奴隷は好まれない」と忠告している。Henry Laurens to Thomas Mears (Liverpool), June 27, 1755; Henry Laurens to John and Willm. Halliday (St. Kitts), Feb. 14, 1757; Donnan, *Documents*, pp. 323-324; 326. ビアフラ出身の奴隷についても、「他の出身地の奴隷が通常価格で購入できるときにはバイト (ビアフラ出身) に手をつける購入者は10人に1人もいない」と記している。Henry Laurens to Jonathan Blundell and Company (Liverpool), May 25, 1756; Donnan, *Documents*, pp. 348-349.

⁹⁰⁾ Henry Laurens to Smith and Clifton (St. Christopher), July 17, 1755, Donnan, *Documents*, p. 326.

⁹¹⁾ South Carolina Gazette, 1733-1774 の宣伝より。奴隷船数は以下の通り。1733-39年: 101隻, 40-49年: 11隻, 50-59年: 90隻, 60-69年: 132隻, 70-74年: 100隻。

⁹²⁾ Richardson, "Slave Trade," pp. 134-137; Higgins, "Charleston," pp. 119-127; Klein, *Atlantic*, p. 164. 1717年から1767年の海軍局リストにある8,500人の奴隷の記録では75%近くがアンゴラ出身で、ガンビア出身は2割を切っている。しかし植民地期後半になると、アンゴラ出身は減り、ガンビアとウィンワード海岸出身の奴隷数が増えている。アンゴラ出身の奴隷は1730年代にピークを迎え、その後ストノ反乱の首謀者たちがアンゴラ出身の奴隷だったことからアンゴラの奴隷を避ける傾向がみられたと考えられる。到達した船の半分以上は出港地を「アフリカ」と記しており、特に18世紀前半にこの記述が目立つのは、多くの場所から奴隷を寄せ集めて船に乗せたためと考えられる。

表8 サウス・カロライナ植民地に入港した奴隷のアフリカの出身地域 (単位: %)

年	1717- 1763年	1733- 1807年	1730- 1744年	1749- 1765年	1769- 1774年	1730年代	1740年代	1750年代	1760年代	1770年代
	(1)	(2)	(3)			(4)				
セネガンビア (ガンビア)	9.8	19.5	11.9	31.3	23.9	12	15	43	22	30
ウィンドワード海岸	7.2	16.3	0.2	22.8	40.1	0	11	15	28	18
黄金海岸		13.3	5.7	10.9	12.0	2	0	8	14	18
ベニン湾岸		1.6	*	3.3	6.7	0	0	4	3	4
ビアフラ湾岸		2.1	8.5	15.6	2.4	8	33	13	0	2
アンゴラ	38.0	39.6	73.7	16.2	15.1	77	41	12	25	14
シエラリオネ		6.8	*	*	*	0	0	4	8	18
マダガスカル ・モザンビーク		0.7	*	*	*	0	0	0	0	0

出所) (1) Clowse, *Overseas Commerce*, p. 31, (2) Curtin, *Atlantic Slave Trade*, p. 157, (3) Richardson, "Slave Trade," p. 136, (4) Morgan, *Slave Counterpoint*, p. 63 より作成。

注: (3) の*はデータなし。(1)についてはガンビア, ウィンドワード海岸, アンゴラ以外のアフリカ出身者が合計が45%。(2)については独立戦争後, また19世紀のサウス・カロライナの奴隷貿易再開後の奴隷輸入数も含む。

サウス・カロライナの奴隷輸入の開始はバージニアより遅いが, 1730年代以降, 輸入制限を目的とした関税が制定されている時期を除いて, 輸入数は変動しながらも独立期まで増加傾向にあった。バージニアの輸入が減少する時期に, 逆にサウス・カロライナでは増え, 植民地期の奴隷輸入総数はバージニアを上回った。サウス・カロライナの特徴の一つは, チャールストンがノース・カロライナ南部からセント・オーガスティンまでの奴隷の玄関口となり, その一帯に奴隷を供給する拠点となったことが挙げられる。ローカントリーの奴隷取引はチャールストンに集中していたため, 取引や分配コストの低下, 手形の提供, 市場や輸送コストの情報の獲得などの利点があり, 奴隷船の停泊日数も削減でき, 貿易全体の回転率も速まり収益の増加を実現できた。この点は, メリーランドのアナポリス, ボルチモアやポトマック川沿い, バージニアのラパハノック, ヨーク, ジェームズ各川沿いに拠点が分散したチェサピーク湾岸地域の奴隷取引とは大きく異なった⁹³⁾。

サウス・カロライナもバージニアも, 奴隷の大半はアフリカからの直接輸入であった。西イ

ンド諸島を経由した奴隷は好まれず, 差別関税を設けて入港制限を図ったためその割合は少なかった。奴隷のアフリカでの出身地に関しては, 両植民地で共通点もあったが, 違いも見られた。バージニアではビアフラからの奴隷が多かったのに対し, サウス・カロライナでは避けられ, 逆にサウス・カロライナで増加傾向にあったアンゴラからの奴隷は, チェサピーク湾岸地域一帯で避けられる傾向にあった。一方, セネガンビアや黄金海岸出身の奴隷は, いずれの植民地でも評価が高かった。こうしたプランターの嗜好に関しては作物生産との相性や奴隷の体格・気質など, 様々な理由が挙げられるが, 需要側の制約と供給状況との決定メカニズムについてはまだ不明な点が多い。アフリカでの奴隷獲得状況, 特にイギリス商人の現地での活動や戦略, 他国との競争などを考慮した上で, 全体の傾向を分析する必要がある。両植民地とも, 関税政策で奴隷輸入の制限を加えようとしたが, 奴隷のもたらす社会不安をより恐れたのはサウス・カロライナであった。サウス・カロライナは人口に占める奴隷の割合が高く, ストノ反乱などの事件を実際に経験したことも規制強化に傾く要因となった。しかし, そうした措置も一時的であり, 奴隷輸入は再開されている。ローカン

⁹³⁾ Walsh, "New Findings," pp. 11-21; Morgan, "Slave Sales," p. 909.

トリーでは自然増加の実現が遅かった上、奴隷供給地域が内陸へ拡大し、米生産が大量の奴隷を必要としたことから、独立後も奴隷輸入を停止するのは地域経済にとっては得策ではなかった。奴隷貿易が衰退期に入っていたバージニアとは対照的に、サウス・カロライナでは貿易の継続によってもたらされる収入は大きく、憲法制定会議の場でも連邦による奴隷制廃止の動きに強固に反対した。その後各州が相次ぎ奴隷貿易を停止する中、一旦は州として停止に踏み切ったものの、13州の中で唯一1800年代に奴隷貿易を再開し、1808年の連邦の正式な奴隷貿易廃止決定までに更に5万人程の奴隷をアフリカから輸入する道を選んだ⁹⁴⁾。

おわりに

大西洋奴隷貿易全体の中での北米植民地の割合は小さかったが、18世紀初頭から約40年間はバージニア植民地が、その後は独立戦争までの時期をサウス・カロライナ植民地が西インド諸島に次ぐ重要な奴隷市場であった。両植民地では奴隷の継続的な輸入に頼る換金作物の輸出貿易体制が確立し、奴隷の輸入によって支えられた経済成長と、それに伴う社会の変化に対応し

ていった。両植民地では換金作物の性質や生産状況、人口構成が異なり、奴隷輸入についてもその対応に差が見られた。そこで生まれた両植民地の特質は、独立後にも継承された。近年研究が進む奴隷のアフリカ文化・慣習の連続性、クリオール化の問題については、本研究ではその可能性の一端を見ることはできたが、アフリカでの奴隷獲得状況や、到着後の奴隷の分布についてなど別途考慮すべき課題が多い。西インド諸島と北米植民地の関係についても、奴隷貿易に関しては北米植民地があくまで副次的な供給先として、品質の良くない奴隷が回されて入港していたことが分かった。一方、西インド諸島と北米植民地間の他の貿易では諸生産物取引が盛んであったことが分かっており、北部植民地との貿易も含めて、イギリス植民地間の貿易体制を総合的に捕えた上で、植民地間の奴隷貿易、および大西洋奴隷貿易について再考察する必要がある。また、英米両方における奴隷商人層の分析⁹⁵⁾、植民地における奴隷取引パターンの変化などの課題が解明されると、北米植民地における大西洋奴隷貿易の実態がより明瞭になると考えられ、今後の課題として研究を継続したい。

⁹⁴⁾ Jed Handlesman Shugerman, "The Louisiana Purchase and South Carolina's Reopening of the Slave Trade in 1803," *Journal of the Early Republic* 22, 2002, pp. 263-290; James A. McMillin, *Final Victims: Foreign Slave Trade to North America, 1783-1810*, Columbia: University of South Carolina Press, 2004, pp. 7-13.

⁹⁵⁾ ブリストルに関しては、まとまった研究がある。David Richardson ed., *Bristol, Africa and the Eighteenth-Century Slave Trade to America*, Bristol Record Society Publications 38, 39, 43, 48 (1986-91).